

義のために迫害される者の幸い

この世におけるキリスト者の特性と祝福を教える主イエスの「八福のメッセージ」の最後は、義のための苦難である。「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」と主は言われた（5：10）。前の第6節で、飢え渴いている人のように神を求め神の前に義であることを求めて生きる人の幸いを語った主は、更にここで、神のため義のために苦難を受ける者の幸いを語る。

信仰に生きるということ、義に生きるということはこの世においては絶えざる困難があり戦いがある。これは確かに厳しいことであるが、しかし、その戦いの中にキリスト者の栄光があることを主の御言葉は逆説的に語っている。神の国の祝福にあずかる者とは、神のために義のために時には死をもかける人のことであると主は言われる。確かに、教会の歴史は、キリストの弟子たちの、神に真実に生きたゆえの迫害と殉教の血で染められている。

以前読んだ本の中で渡辺信夫師は次のように言う。古代の迫害の下にあった教会には「血の洗礼（バプテスマ）」という言葉があった。それは、洗礼を受ける前にすでに殉教を余儀なくされた人が、自分の殉教の血をもって水による洗礼に代えたことをさす。迫害下に生きた彼らにとって洗礼すなわち殉教を意味した。

それは当時だけの事情だったのだろうか、と渡辺師は問い、そうでないと答え、次のように続ける。洗礼も聖餐も、主イエス・キリストへの参与なのであって、それにおいて、キリストの恵みの受領とともにキリストの苦難への参与が起るのである。使徒パウロは言う、「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリスト共に葬られ、その死にあずかるものとなりました」（ローマ6：3、4）。それがバプテスマの意味なのである。

渡辺師は更に続ける。教会は統計表を作って、何人がバプテスマを受けたかを報告する。それは、しかし、人に対する報告ではない。主なる神に対する報告である。「主よ、あなたのために死ぬ人が何人います」と報告することを意味するのである、と（渡辺信夫著「マルコ福音書講解説教」）。実に鋭い言葉である。人が信仰告白をしてバプテスマを受けるということは実に厳粛なことであり、そしてバプテスマを受けてキリスト者として生きるということとは実に身の引き締まるような出来事なのである。

主イエスは決して安易な恵みを約束されなかった。義のために苦しむことも主の恵みの一形態であると言われた（マルコ8：34～35、フィリピ1：29参照）。この世で神に忠実に生きることは、確かに戦いを意味するが、しかしその戦いの中にキリスト者の栄光があると主は言われるのである。その戦いは救いの祝福を得るための戦いではなく、すでに神の国に属するという祝福にあずかっているが故の戦いである。天の国の祝福はすでにキリストにあって確実に私たちに与えられている。主は言われた、「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」と。それ故、人々から笑われることを恐れてはならない。変人扱いされることを恐れてはならない。非難され中傷され反対されることを恐れてはならないのである。